

心のバリア ユニバーサルデザイン考

◇3◇

山あいの道をひたすら進むと、携帯電話の表示が「圏外」になり、真新しい学校が現れた。兵庫県淡路島。00年の「淡路花博」を一過性のイベントで終わらせず、「人と自然の共生」の環境づくりをする人材を育てようと、99年に県立淡路景観園芸学校（石原憲一郎校長）が開校した。

当初は「景観園芸専門課程」だけだったが、02年には障害者や病気の高齢者を園芸作業を通して回復させる園芸療法を学ぶコースも置かれた。

その理由の一つに、95年に

起きた阪神大震災での教訓もあった。震災後、神戸市などには仮設住宅が次々と建ったが、無機質な仮設住宅に住む人たちは潤いとなる花や緑を求めた。「被災者と一緒に花を植えたもんです。

『ありがとう』って感謝されてね」と石原校長。仮設住宅では高齢者が孤独死するケースも相次いだ。「植

物を育てていけば水やりや手入れで外に出るでしょう。そうすれば、顔を合わせた人同士で話がはずむ。花は、人々を外出させる磁石になるんです」。石原校長は花や緑の有用性に着目する。

＊ ＊ ＊

園芸療法課程には現在16人が学び、訪ねた時は身体障害者療護施設で実習中だった。クリスマス用の寄せ植えを施設の障害者と完成させる作業だ。16人は20～40代で全国各地から集まったが、これまで仕事を持っていた人が多い。

「（花は）彩りで選びましょうか？ 香りで選びましょうか？」。車椅子の女性に声をかけていた三輪悦子さん（27）は名古屋市の病院で4年間、作業療法士をしていた。当時、三輪さんは病院の空き地にチューリップや夏野菜を植えることを思いついた。たとえ院内でも、体を動かして植物の世話をするのは患者のためにもなると考えたからだ。作業中に生き生きとした表情を見せる患者の姿が印象的だった。「自分自身、園芸療法がきっかけで知識がほしい。同課程の設置を知っ

園芸療法の人材育成



「利き手はどちらですか」。三輪さん（右から2人目）は女性に声をかけながら作業を進めた＝兵庫県淡路島で

「働く場」をどう確保

て、三輪さんは入学を決意した。

同校は全寮制で、園芸療法課程の学生たちは園芸学、障害学、病理学といった幅広い知識を学ぶが、同県認定の園芸療法士の資格を取得できる。来年4月から始まる実習で、三輪さんは静岡県内の病院での研修を検討している。

「高齢者と接し、治療の手段として園芸を取り入れたい」。9月に入学後、園芸療法の基礎を学んだ今、三輪さんはそ

園芸療法士 国家資格は現在なく、淡路景観園芸こほ学校の修了生が取得する「園芸療法士」は兵庫県の認定。1年間で「大学院レベル」（同校）の2000時間の授業を受ける。一方、「初

んな目標を心に描いている。

＊ ＊ ＊

淡路花博に次ぐ国際園芸博として開催された浜名湖花博。人材育成という点で、県内にポスト花博の動きはある

級園芸福祉士」はNPO「日本園芸福祉普及協会」の認定資格で、20時間以上の講座を受けた人に受験資格が生まれ、カリキュラムは園芸福祉の基礎的内容となっている。

のだろうか。

障害者が雇用先として農業分野で働くには「農業・園芸分野」と「福祉」の両面に精通した人（ジョブコーチ）が欠かせないが、県によるとそ

うした人材は圧倒的に不足している。花博跡地にできる「浜名湖ガーデンパーク」では、「初級園芸福祉士」の養成講座を開く計画が進んでいる。この資格は園芸療法の「入り口」に立ったと見るのが適当で、ジョブコーチへの出発点に過ぎない。

「ジョブコーチがボランティアでは続かない。仕事としての彼らの働く場をどう確保するのか。それが課題になっている」と、県農業振興室の小林栄人室長は言う。園芸療法への理解が深まり、専門家がその腕を存分に発揮する。そんな日が来れば、皆が暮らしやすい社会にまた一歩近づけそうだ。

＝つづく